時勢かくの如くなりしを以て、將軍の養君問題は、これと相關係して、頗る重大なる事端を誘ひ起せり。養君問題につきては、これを次節以下に述べんと欲す。

（つゞく）

我をわれとしろしめすかやすめらぎの
　玉の御聲のかゝる嬉しさ
晴間なく空に雲そう五月雨に
　軒端の梅に實さへこぼるゝ
ひえの山見おろす方ぞ哀なる
　いま九重の數したられば
大君に捧げ奉りしわが命
　今こそ捨つる時はきたけり

文苑

＊＊＊＊＊＊＊

はるさめ會連句

ろすみ

つばき

露を命の　玉つばき
雪のかゐなを　さしのべて
おらんとすれば　一トしずく
落るは花の　涙かも』

すみれ

ゆかしの色よ　濃紫
君が送りし　壺すみれ

手なれの文に　はさみては
夜毎の夢も　露しげし』

少女子　小林恒

一、明治の御代の乙女子は　たかき光りを仰ぎつゝ
心も清く身もつよく　ありし昔のかたみなる
母ともなれや正行の　妻ともなれよ忠興の
二、大和島根の女郎花　露のなさけも天地の
深き恵にそぼちつゝ　雨にも風にも撓みなく
八重と一重に芳しく　世界の園に咲きいでよ

梅（竹柏園歌會兼題）

すりなかす墨のかならて窓近く匂ふや庭の梅の初はな　増山みゆき子
うなゐ子かせわしくわれにしらせけりはちの梅か枝花のさきぬと　大河内國子
樺山常子

池の上にちりうく梅の花ひらを餌とや見るらん鯉のむれくる　兒玉千代子
春なさみ巣こもりしたる鶯もまつ咲く梅にゆめさますらん　松井とも子
なきわこさ去年はとひこし木下川の老木の梅の今さかりなり　宮本よりは
北向の梅のしこ枝咲にけりきりのこされてうりのこされて　大竹以勢子
祖父君のゝに植なへし梅林春くる毎に裏をそだもふ　松浦島子
ありし世に好みてめてし人なちんおくつきのあたりあまた梅あり　淺井鐵子
しきみうるみ寺の門のちさき家のみなみの軒にうめの花さく　堀孝子
けふあすはまた早けれと師の君に折りてさゝくる軒の梅かえ　堀越科子
風寒みちりくる花を袖にうけて梅のこかけにうなゐこ遊ふ　大村八代子
御社に筆奉り梅たちて手習そめし昔ゆかしき　長谷川柳子
そゝろにも筆とりて見ん朝かな紅梅にほふひんがしの窓　久保花子
一つ樹に一つ苔の梅なからおくれ先たつ宿世ありけり